

夢湧は夢に夢中

第5号

令和6年6月26日 文責：大谷

“優しさで勝った”南阿蘇中はわたしの大きな誇りです。

令和6年度阿蘇郡市中体連総合体育大会が、一部の競技を残して終了した。わたしは初日、柔道競技の会場長として阿蘇中央高校の柔道場にいた。他競技に比べ競技者は決して多くないものの、会場に一歩足を踏み入れるや、何とも言えない緊張感に背筋がピンとなるのを感じた。

開始式を終えると、早速試合が始まった。本校から高森少年柔道クラブの一員として一年生の男子生徒が出場した。結果は負けてしまったものの、次への確固たる強い気持ちで、直後の表情から感じた。そして、閉会式後に始まった強化練習会では、柔道を志す仲間たちとともに、切磋琢磨する姿があった。負けは終わりではない、始まりなのだと思った。期待が膨らむ。

二日目は軟式野球の会場長として一の宮総合運動公園へ行く予定だったが、前日に雨天順延が決定されたので、バレーボール会場へ駆けつけた。女子の試合の第2セット前に到着。スコアボードを観ると、どうやら第1セットは先取されたようだが、2階席にいるわたしを見つけるや、こちらに向かって笑顔で手を振ってくれる姿に手応えを直感した。「この明るさがあればいける」と。

第2セットは一進一退の攻防が続いた。手に汗を握るとはまさにこのことかと思った。そのような中、時には手痛いミスもあり、徐々に点差が開いてしまう。焦る自分。

しかし、選手たちに焦りは一切ない。むしろミスした仲間のところへ駆け寄り声を掛ける。そして、さらにチーム全体に大きな声を掛けながら仲間たちを鼓舞する。コートから離れたところで観戦していたので、どのような声を掛け合っていたのかは聞き取れなかったが、誰一人として勝負を諦めていないことは見て取れた。きつとかげがえのない仲間との濃密な時間を共にしていたのだろう。試合後の涙とは裏腹な弾ける笑顔が、何とも清々しかった。

女子に引き続き、男子の決勝戦が始まった。開始直後、立ち上がりから激しい展開が続く。バレーボールとは実に難しい競技で「流れ」をいかに引き寄せるか悩ませた。しかし、そのような中でもキャプテンを中心に、常に声を掛け合う姿があった。そして、粘り強くボールに食らいつき、つなぎ、相手へ返していく。たとえミスがあっても、誰もそれを責めない。ここでもどんな声を掛け合っているのか、会場内の大歓声でかき消されてしまい、わたしの所までは聞こえてこないが、コート内はもちろん控えの選手たちにも、下を向く選手はいなかった。きつと、そこにいる全員が勝負を諦めず、仲間と最後まで戦い抜こうとしていたのだろう。何とも誇らしかった。すべての競技を観戦することはできなかったが、きつとどの競技でも南阿蘇中生は「優しさで勝っていた」であろうと確信した。夢は必ずしも「優勝」だけではない。「優しさで勝った」ならば「夢を叶えた」と大いに誇ってもいい、と思う。